教師の主体性を支える遊びの指導の授業づくり（２）

遊びの指導に適したケース検討会の検討

○菅原宏樹　　丹野祐介　　真鍋健
（千葉大学教育学部付属特別支援学校）　　（千葉大学教育学部）

KEY WORDS: 遊びの指導　ケース検討会　子ども理解

Ⅰ．目的

遊びの指導においては「“遊び”と“指導”を両立させることが難しい」、「遊びに関する共通の指標がない」などの問題が指摘されている（進藤・今野，2015)。千葉大学教育学部付属特別支援学校では「遊びの記録表」（菅原ら,2016）を用い、子ども理解の枠組みを提示するなどして、教員の指導（ソフト面）の充実を図り問題に対応している。しかし、指導期間中の時間的な余裕のなさ、経験の少ない教員に対しての適切な研修方法の必要性などから、適切なタイミングでケース検討会を行う必要があるが、遊びの指導における検討は十分でない。そこで本研究では 2 種類のケース検討会を実施し、参加教員の振り返りから、遊びの指導に適したケース検討会の在り方について示唆を得ることを目的とする。

Ⅱ．方法

１）ケース検討会

米国幼児特殊教育領域で用いられる Building Blocks モデル（詳しくは一連研究(1)を参照）を一部参考にして 2 種のケース検討会を行う。＜ケース検討会Ⅰ＞行動・発達的な視点から、事例児の行動の客観的な数量データを用いる。＜ケース検討会Ⅱ＞子どもの活動参加を重視し「安心度・夢中度」から子どもを評価する、日本版ＳＩＣＳ（秋田ら,2010）を用いる。

２）手続き

千葉大学附属特別支援学校の教員 7 名を対象とした。2 つのケース検討会についてのアンケート結果を、KJ 法を用いてグループ化・図化した。図より、遊びの指導におけるケース検討会の在り方について考察を行った。

Ⅲ．ケース検討会Ⅰ（データを用いたケース検討会）

１）開催の経緯や意図

これまで本校の遊びの指導では数量データを実践に生かす機会がなかった。そこで、数量データの有無が遊びの指導における子ども理解にどう役立つか検討した。

２）対象・ケース検討会のセッティング

2016 年 12 月 5 日に 1 回実施した。2 年生男児の「手に物を持つ」行動の数量データを用いた。対象児童は他者に対し積極的に関わろうとする一方で、遊んでいる最中に「道具を手に持つとなかなか放さない」ことが頻発していた。なお検討会の内容は表 1 の通りであり、表中の(3)のプロセスで提示・協議したデータを図 1 に示した。

表1　ケース検討会Ⅰの内容

	内容
(1)	ケース検討会の趣旨説明
(2)	単元中の事例児の姿の振り返り(動画)
(3)	「手に何かを持つ」行動の数量データ提示
(4)	「手に何かを持つ」行動に関する教員間協議
(5)	今回のケース検討会の評価(個別アンケート)

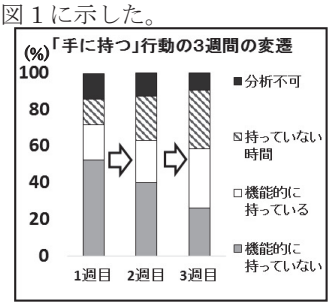

図1 検討会で使用した数量データ

Ⅳ．ケース検討会Ⅱ（日本版 SICS を用いたケース検討会）

１）開催の経緯や意図

行動・発達的な側面や遊びの広がりといった側面以外にも目を向ける必要を感じ「安心度・夢中度」という観点による子どもの評価を通じた研修ツールである、日本版 SICS を導入し、遊びの指導における子ども理解にどう役立つか検討した。

２）対象・ケース検討会のセッティング

2016 年 12 月 16 日に 1 回実施した。事例児となった 1 年生男児は、1 回目の単元では周辺から場の様子を見ることが多く、また言語・コミュニケーションの制限があり、協議に適していると考えられた。なお検討会の内容は表 2 の通りである。表中の(4)で各教員が行った、「場面１」における事例児の安心度・夢中度の評定を表 3 に示す。

表 2 ケース検討会Ⅱの内容

	内容
(1)	ケース検討会の趣旨説明
(2)	日本版 SICS の説明
(3)	単元中の事例児の姿の振り返り(動画)
(4)	場面1、2について、「安心度-夢中度の評定」
(5)	今回のケース検討会の評価(個別アンケート)

表 3 検討会Ⅱでの「場面 1」への評定

	安心度	夢中度
教員 A	3	2
教員 B	3 or 4	2
教員 C	2～4	2.5
教員 D	4^-	3^+
教員 E	3^+ or 4^-	2^+
教員 F	3 に近い 4 か 4 に近い 3	3 に近い 2
教員 G	3～4	4→2→5

Ⅴ．KJ 法によるアンケート結果の整理

検討会Ⅰ、Ⅱ双方で「研修に動画を用いる」という点を評価するものが多かった。これまでは共通理解のために遊びの記録表を用いてきた。しかし、今回の検討会の結果から、自由遊びでの子どもの行動はまさに一瞬一瞬で再現性が低いため（見逃して記録にすらなっていないものもたくさんあり)、文章ベースでの共通理解には限界があったことが示唆された。つまり、遊びの指導におけるケース検討会でのポイントの 1 つはビデオの活用だと考えられる。

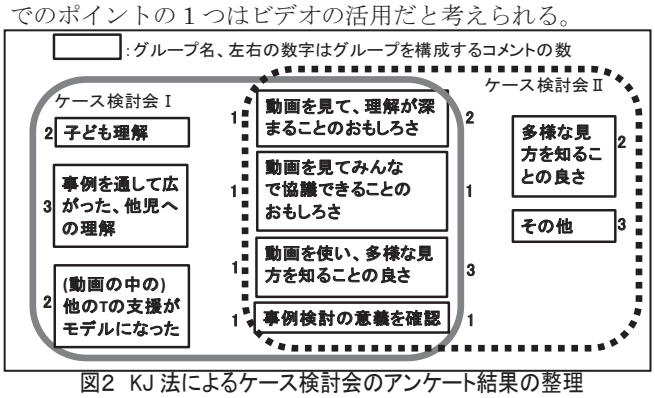

図2 KJ 法によるケース検討会のアンケート結果の整理

Ⅳ．文献

秋田喜代美ら(2010)「子どもの経験から振り返る保育プロセス」-明日のより良い保育のために」

進藤拓歩ら(2015)「知的障害特別支援学校における『遊びの指導』についての教師の意識秋田大学教育文化学部研究紀要. 教育科学 70, 125-141

菅原宏樹ら(2016)「遊びの記録表が遊びの指導の授業づくりにもたらした影響に関する研究」千葉大学教育学部研究紀要 64,295-300

※本研究の発表にあたり 2 名の事例児の保護者へ承諾を得ました。

※本研究では千葉大学教育学部の砂上史子先生より多くのご協力を頂きました。感謝申し上げます。

(SUGAWRA Hiroki, TANNO Yusuke, MANABE Ken)